

論  
稿ブラジル・サンパウロの外国移民と  
新たな治安対策Foreign Immigrants and the New Security Measures in São Paulo,  
Brazil

近田 亮平

KONTA, Ryohei

## 要 約：

サンパウロ州はブラジルのなかでも外国移民を多く受け入れ、州都であり南米最大の都市サンパウロ市では現在でも多くの外国人が居住や往来をしている。一方、ブラジルは治安が劣悪なことで知られているが、サンパウロ州の警察は 1990 年代以降、日本の交番システムをベースにした施策も含め、地域コミュニティを重視する治安対策を実施している。本稿では、サンパウロ市の外国移民が多く居住・労働する地区でのフィールド調査をもとに、新たな治安対策が試みられるなか、犯罪に巻き込まれる可能性も高い外国移民がどのような状況にあるのかを究明する。そして、犯罪の予防には地域コミュニティに関する情報の共有が重要であり、新たな治安対策は情報共有のネットワークを構築しようと試みているが、外国移民は情報共有の場との関係性が希薄である現実を指摘する。

キーワード：ブラジル、サンパウロ、外国移民、治安対策、地域コミュニティ、情報の共有

## はじめに

おもにインターネットの普及が進んだ 1990 年代以降の世界において、国境を越えたヒトやモノ、資金などの移動が大量かつより速く行われるようになった。このような現象は「グローバリゼーション」と呼ばれ、国家の役割の低下という議論とともに、国家を前提としていたそれまでの「国際関係」や「多国籍」企業などの用語に取って代わり、一般的に広く使われるようになった。グローバル化の進む世界で関心が高まった研究対象として、グローバル・シティと称され国家や国境に比して重要性を増した世界の中核都市、および、そこに国内だけでなく越境して移動するヒト、つまり移民を挙げることができる。そして、グローバリゼーションをめぐる世界の中核都市や外国移民の研究は、1990 年代から現在まで多くの研究が国内外で行われてきた [伊豫谷 1993; Sassen 2000; 松久 2020]。

本稿ではこのような近年の研究関心の潮流をふまえたうえで、南米最大の都市サンパウロの外国移民<sup>1</sup>を、ブラジルで深刻な治安問題との関連から取り上げる。サンパウロはブラジルのなかでも外国移民を多く受け入れた州であり、州都のサンパウロ市では現在でも多くの外国人が居住や往来をしている。一方、ブラジルは治安が劣悪なことで知られているが、サンパウロ州の警察<sup>2</sup>は 1990 年代以降、日本の交番システムをベースにした施策も含め、地域コミュニティを重視する治安対策を実施している。ただし、サンパウロでは外国人が犯罪に巻き込まれる事件がしばしば発生しており<sup>3</sup>、外国人などの異郷から来た人が多いサンパウロでの偏見や周縁性にもとづく犯罪についても指摘されている [Caldeira 2000, 80]。そこで本稿では、サンパウロ市の外国移民が多く居住・労働する地区でのフィールド調査をもとに、新たな治安対策が試みられるなか、犯罪の標的となる可能性も高い外国移民がどのような状況にあるのかを究明する。

本稿では、はじめに外国移民を多く受け入れてきたサンパウロの外国人の状況について概観する。つぎに、サンパウロ州の警察による地域コミュニティ重視の新たな治安対策を説明する。その後、サンパウロ市でのフィールド調査のなかから、関係者に行ったインタビュー調査を民族誌的に分析する。そして最後に、犯罪の予防には地域コミュニティに関する情報が重要であり、新たな治安対策は情報共有のネットワークを構築しようと試みているが、外国移民は情報共有の場との関係性が希薄である現実を指摘する。

<sup>1</sup> 「外国移民」とは国境を越えて移動する移民であり、本稿ではサンパウロで長期にわたる居住や労働をしている「外国人」を主として、外国からの移民の子孫である「外国系ブラジル人」も意味する。ただ、対象に長期滞在者や難民など海外へ移り住んだ移民ではない外国人も含まれるため、適宜「外国人」などと表記する。

<sup>2</sup> ブラジルの警察は軍警察 (polícia militar) や市民警察 (polícia civil) など、担当する分野で組織が異なり、連邦警察 (polícia federal) などを除き管轄は各州によるものである。本稿で言及する「警察」はとくに付記がない場合、事例の治安対策を実施している「サンパウロ州軍警察」を意味する。

<sup>3</sup> [Dois bolivianos são mortos a tiros no Pari; outro fica ferido](#), *O Estado de São Paulo*, 19 de agosto de 2019. 2020 年 6 月 8 日アクセス。

## 1. サンパウロの外国人

サンパウロ州はコーヒーの一大生産地として 20 世紀前半に外国移民を多く導入した。1900 年の外国人比率は 21.0%で(表 1)、同州に居住していた約 5 人に 1 人が外国人だったと推定される。サンパウロ州にはイタリア人を筆頭にヨーロッパや日本などから多くの外国人が移民し、移民大国ブラジルの国民や社会を形成していった。

本稿の調査対象地であるサンパウロ市については、南米の最大で経済の中心都市であるため今でも多くの外国人が居住・往来している。2001 年から 2017 年 6 月までのサンパウロ市における外国人登録者数をまとめたのが表 2 である。ボリビア人が 8 万人以上と突出し、つぎに中国人が 2 万人超となっている。ボリビアやペルーなどアンデス地方からサンパウロへ来る外国人は、その多くがフォーマルまたはインフォーマルで縫製業に従事し、中国人は衣料などの小売業を営む人が多い。また、近年のブラジルは外国移民を実質的に停止しているが、同国は難民を多く受け入れており、難民の多くが経済の中心地サンパウロ市へ向かう。そのため、ハイチ人の登録者数が 1 万人以上となっており、より最近では政治経済が不安定なベネズエラからの難民が増えている。

また、ブラジルでは国境が地続きで 10 カ国と接することもあり、後述するように隣国からの不法外国移民も多く居住している。おもに経済的理由でブラジルへ来る不法外国移民はサンパウロなどの大都市に多く、サンパウロ州の不法外国移民は州政府によると 2014 年時点で少なくとも 100 万人以上と推定される<sup>4</sup>。

表 1 サンパウロ州の人口と外国人の推移 (単位: 割合以外は「人」)

年	1890	1900	1920	1934	1940	1950
ブラジル人	1,309,723	1,801,191	3,758,479	5,497,826	6,363,320	8,440,768
外国人	75,030	478,417	829,851	931,691	814,102	693,321
合計	1,384,753	2,279,608	4,588,330	6,429,517	7,177,422	9,134,089
外国人比率	5.4%	21.0%	18.1%	14.5%	11.3%	7.6%

(出所) Bassanezi et al. [2008, 22] をもとに筆者作成。

<sup>4</sup> “SP tem ao menos 1 milhão de imigrantes ilegais, diz governo.” *Terra*, 15 de dezembro de 2014. 2020 年 6 月 8 日アクセス。

表2 21世紀に入りサンパウロ市で外国人登録した国別人数

順位	国	人数
1	ボリビア	83,497
2	中国	20,819
3	ハイチ	14,000
4	ペルー	13,151
5	米国	13,008
6	アルゼンチン	10,590
7	コロンビア	8,981
8	パラグアイ	8,826
9	日本	8,607
10	フランス	8,106

(出所) O Estado de São Paulo 紙。原出所は連邦警察。

(注) 2001～2017年6月まで。

## 2. サンパウロの新たな治安対策

人口が約2億1000万人のブラジルでは、2017年に6万4078人、2018年に5万7358人と毎年6万人前後が殺人事件の犠牲となるなど<sup>5</sup>、治安の問題は深刻なままである。ただし、本稿で取り上げるサンパウロ州と市では、おもに殺人事件が21世紀に入ってから約70%も減少した。治安状況の変化にはさまざまな要因が複雑に影響を与えていることや、治安に関しては有意なデータの入手が困難であるため、サンパウロでの殺人事件減少については複数の要因が挙げられている。それらにはサンパウロ州警察の組織改革、警察官の待遇改善、政府による治安に関する法改正や施策の実施、ブラジル経済の好調、人口構成の変化などがあり、そのなかに本稿で取り上げる地域コミュニティ重視の治安対策がある [Peres et al. 2011; Freire 2018]。

ブラジルは1985年まで21年間にわたり軍事政権だったこともあり、同国において警察は国民を強圧的に監視・支配する機関というネガティブなイメージが強い。実際にブラジルでは警察による暴力や殺害も深刻な問題となっており、警察と市民の関係は必ずしも良好とはいえ治安改善の障害となっている。そのためサンパウロ州警察は1990年代、警察に対するイメージや市民との関係性の改善、そして防犯機能の向上につながると考えられる地域コミュニティベースの施策、つまり警察官が地域住民に近づき交流を深めるといった戦略を打ち出した [Araújo 2014; Shimizu 2015]。このような新たな治安対策はコミュニティ・ポリシングなどと称され、ブラジルの治安研究においても近年の変化のひとつとして注目されている [Muniz, Caruso e Freitas 2018]。本稿では、このような地域コミュニティを重視する新たな治安対策のベースとしてサンパウロ州警察が

<sup>5</sup> UNODC (United Nations Office on Drugs and Crime) DATAUNODC.

導入した、日本の交番システムのブラジル版である「治安コミュニティ拠点」(Base Comunitária de Segurança : BCS)に加え、携帯アプリの普及もありより最近実施されるようになった「近隣連帯プログラム」(Programa Vizinhança Solidária)を取り上げる。

#### (1) ブラジル版交番 BCS

1990年代に「市民との交流及び信頼関係構築を通じた地域警察活動の導入」[JICA 2011, 3]を試み始めたサンパウロ州警察は、1997年に日本の交番を模範とした新たな治安対策を独自に施行した。そして、2000年から日本政府が交番制度の普及に対して協力を開始し、2005年に最初のブラジル版交番である「治安コミュニティ拠点」(BCS)がサンパウロ市内に設置された。その後、BCSはサンパウロ州内や国内の他の州だけでなく、中南米諸国でも導入されるようになった。BCSは日本の交番と同様、基本的に警察官数名が24時間常駐し、問題を抱える訪問者の応対や管轄地域で発生する事件への対応を行うとともに、パトカーやバイクで巡回する警察官のローカル拠点になっている。

BCSに関してはフィールド調査などをもとに、現地の状況に合わせて実施が進められるとともに警察自体の組織の強化をもたらしている点[Ferragi 2011]、治安状況を改善し得る良好な関係を構築できるか否かは駐在する警察官個人の能力に依る点[清水 2013]、BCSでの勤務者が警察官としての内面や行動に変化を及ぼしている点[Shimizu 2015]などが指摘されている。また、警察官自身による調査研究では、日本および交番システムを導入した他の中南米諸国との比較が行われている[Nascimento e Teixeira 2016]。

筆者はサンパウロ州警察から許可を得ることができ、サンパウロ市でBCSに関するフィールド調査を実施した。BCSの活動は勤務する警察官の能力や性格、管轄する警察署の計画に依るところが大きいが、活動が活発なBCSでは警察官による地域住民の自宅訪問や、それに基づく地域コミュニティ情報のデータベース化が行われている。またBCSのなかには、地域住民を対象としたサッカーや体操教室、通学時の児童の警護、イベント時の慈善施設訪問とプレゼント贈呈を行うものや、警察官は24時間駐在しないが車両を改造した移動式のものもあり、日本の交番と異なり“ブラジル化”している(写真1)。ただし、とくに都市周辺部など治安がより劣悪な地域のBCSでは地域コミュニティとの良好な関係性の構築が困難なことや、おもに人員削減によりBCSの活動は以前より活発でなくなってきたことがわかった。



写真1 パリ地区のBCS警察官（立っている男性）による地域住民を対象とした体操教室（2018年9月 筆者撮影）

## (2) 近隣連帯プログラム

サンパウロ州警察による地域コミュニティ重視の施策として、2010年代から施行されているものに「近隣連帯プログラム」(Programa Vizinhança Solidária)がある。同プログラムでは、近隣住民同士の面識や交流が希薄な傾向の強い都市部において、はじめに警察官が地域の家庭やマンションを訪問し、隣人同士の紹介やマンションの管理人・住民代表者との接触を行う。その後、ブラジルで広く普及している携帯アプリ<sup>6</sup>などにより、隣人同士や管理人・住民代表者とマンション住民を繋げるグループを作成する。そして、不審者などを見かけた場合、携帯アプリのグループに情報を流し警戒を呼び掛けるとともに、必要であれば警察に通報するようになっている。つまり近隣連帯プログラムは、地域コミュニティで治安に関するネットワークを構築し、情報を共有することで治安の改善を試みる施策である<sup>7</sup> [Araújo 2012]。

サンパウロ州では2018年に近隣連帯プログラムに関する法律が制定されるなど、その普及が試みられている(写真2)。ただし、本稿後半のインタビューや筆者が実施したフィールド調査からは、市民のあいだで近隣連帯プログラムの認知度は非常に低く、同プログラムは開始されたばかりであるか、または、普及に関して何かしらの問題を抱えていると考えられる。いずれにせよ近隣連帯プログラムは、地域コミュニティを重視する新たな治安対策であることは間違いない。

<sup>6</sup> ブラジルではWhatsAppが主流である。

<sup>7</sup> [Vizinhança Solidária](#), Dornellas, Helena S., 2 de julho de 2017, 2020年5月24日アクセス。



写真2 マンションの入り口に掲示された近隣連帯プログラムの告知板  
(2019年1月 筆者撮影)

### 3. 地域コミュニティと外国移民

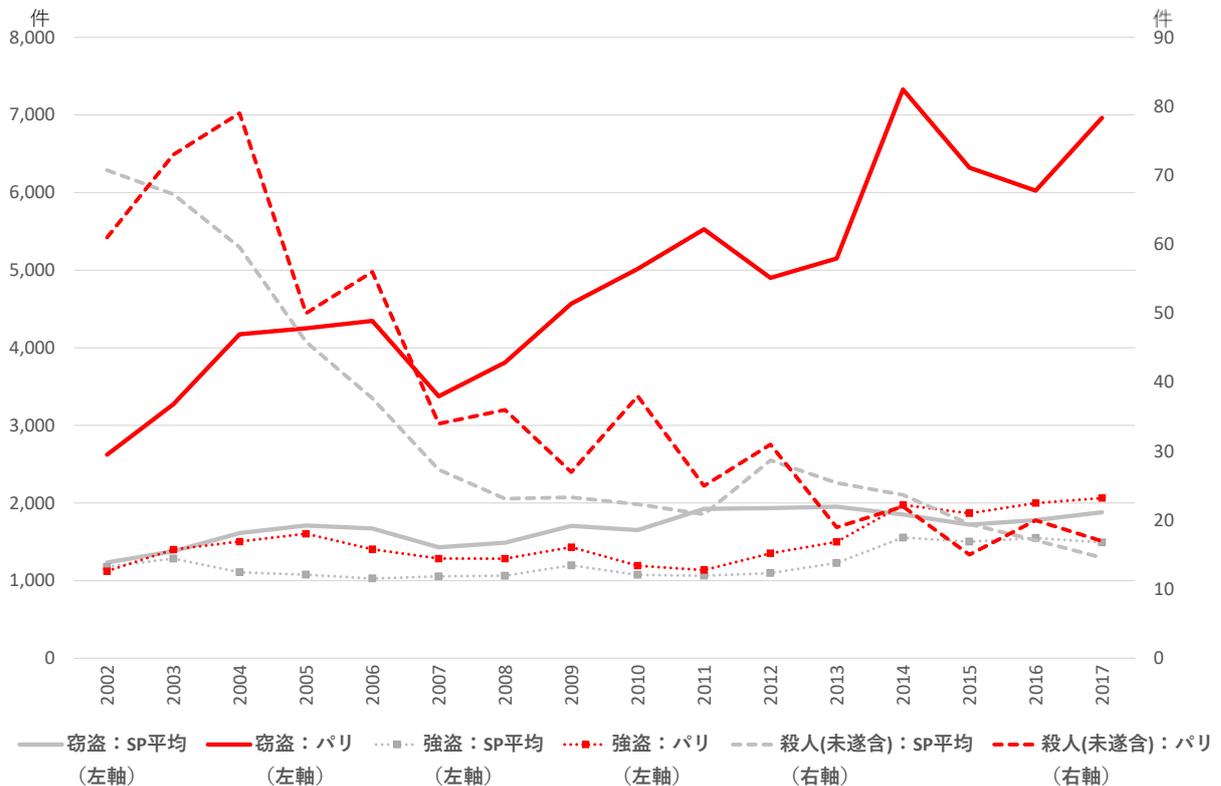
前節までにおいて、ブラジルとサンパウロの外国人の状況について概観し、サンパウロ州警察が地域コミュニティを重視し新たに導入した治安対策を紹介した。サンパウロ市の治安状況について市全体の平均値は、前述したように殺人事件に関して近年大幅に減少した一方、窃盗と強盗はおおむね横ばいで推移している。これに対して外国人が多く居住するサンパウロ市中心部のパリ（Pari）地区では、サンパウロ市の平均と比べると殺人事件の減少と強盗の横ばいは同様の傾向にあるが、窃盗の発生件数が非常に多くなっている（図1）。そこで本節では、サンパウロ市の治安状況に影響を与えた新たな治安対策と外国人・移民の関係性に着目し、フィールド調査で行ったインタビューの一部を民族誌的に分析する。

#### (1) サンパウロ市でのフィールド調査

はじめに筆者がサンパウロ市で行ったフィールド調査について概説する。筆者は2017年10月から2年間サンパウロ市に滞在し、おもにブラジル版交番であるBCSに関する調査を行った。予備調査で市内の中心部と周辺部のBCSの比較を試みたが、現地の治安状況が劣悪なため調査の実現可能性は非常に低いとの判断に至った。一方、外国人などの異郷から来た人が多いサンパウロでは犯罪が偏見や周縁性と関連する傾向が強く〔Caldeira 2000, 80〕、外国人が対象となったり犯したりする事件がしばしば発生している。また、外国人が多く居住する地域では前述のパリ地区で窃盗事件がより多いなど、治安状況がサンパウロ市の平均と異なっている。さらに、過去に外国移民を多く受け入れ、グローバリゼーションが進むなか南米地域のグローバル・シティとして重

要性を高めたサンパウロには、現在も外国人が多数居住・往来している点に注目し [Marques e Torres 2000]、外国人に焦点を当てた BCS のフィールド調査を考案した。本調査では、対象 BCS の警察官、地域の治安関係者、外国移民や支援者などへのインタビュー調査や対象地域での参与観察を行った。

図1 サンパウロ市（平均）とパリ地区の犯罪別発生件数の推移



(出所) サンパウロ州公安局のデータをもとに作成。  
 (注) 「SP」は「サンパウロ市」。

本調査では、外国人や移民が多く居住または労働している点を考慮して、サンパウロ市の中心部に隣接して位置するブラス (Brás)、パリ、ベレン (Belém) の3つの地区を選び、各地区に1カ所ずつ設置された BCS を対象とした (写真3)。サンパウロ市の中心部により近いブラスは、衣料などの小売店や露天商が集中していることで有名で、週末やイベントの際には1日で100万人以上の買い物客が訪れるなど<sup>8</sup>、ブラジル国内でも広く知られた大衆向け商業地区である。パリとベレンは住宅地がブラスより多く、また1節の最後で述べたような縫製業に従事するアンデス系や中国系の人々が多く居住・労働している。パリとベレンでフォーマルまたはインフォーマルに作られた衣料がブラスで売買されている、というのが同地域のおおよその構図である。なお、

<sup>8</sup> Mais de um milhão de pessoas circulam pelo Brás aos sábados, *Globo.com*, 30 de novembro de 2019, 2020年6月6日アクセス。

ブラスには 20 世紀のコーヒー産業興隆期に外国移民を収容した施設<sup>9</sup>があり、本調査の対象地域は歴史的に移民と深い関連性を持つ。現在でも、縫製業と衣料小売りを中心とした大衆向け商業が盛んな同地域は、経済的な理由などから巨大都市サンパウロへやって来る多くの外国人を引き寄せている。

また、ブラジルでは「コミュニティ治安審議会」(Conselho Comunitário de Segurança : CONSEG) という、居住地区の住民と治安当局が治安問題について話し合う会合がある。同審議会は毎月開催されていることが多く、本調査でも上記地区の CONSEG を参与観察するとともに関係者へのインタビュー調査を行った。なお警察以外のインタビューは、CONSEG の要職者に関しては筆者が各地区の CONSEG に何度も参加し関係性を築くことで実現できた。ポルビア系 1 世は後述するコインブラ通りにあるカトリック系外国移民支援団体、台湾系 2 世はコインブラ通りに長年住んだことのあるサンパウロ大学の教員、日系 1 世はサンパウロ沖縄県人会を介して実施することができた。

本節では、はじめに地域の治安関係者として BCS の警察官、および、CONSEG の要職者へのインタビュー調査の結果を提示する。つぎに、移民当事者に関するものを取り上げる。



写真3 外国移民が多く住むベレン地区の BCS (2018 年 7 月 筆者撮影)

## (2) 地域の治安関係者へのインタビュー調査

調査対象のブラス、パリ、ベレンに設置された BCS の警察官とコミュニティ治安審議会 (CONSEG) 関係者に行ったインタビューのなかから、外国人と関連する言説を中心に以下にそれぞれ提示する。

<sup>9</sup> 現在はサンパウロ州移民博物館となっている。

① ブラス 警察官 A 氏（40 代、女性、BCS ではなくブラスを管轄する地域の警察署勤務）<sup>10</sup>

人種の多様性はわれわれ警察にとって困難なことのひとつです。まずは言葉の問題があります。ここにはスペイン語、中国語、アフリカ人の場合はフランス語や英語を話す人たちがいて、われわれはそういう特殊な人々を理解する必要があります。ですが、警官の養成に外国語はあまり求められていません。独自で外国語を学習する部署もありますが少数で、このような現場の警官のほとんどは外国語ができません。言葉以外にも、外国人がわれわれの法律を理解するのが難しいという問題があります。外国人が行っていることがわれわれの国では違法であることを説明するのも、彼らが理解するのもとても難しいのです。ここにはあまりにも多くの外国人がいて、われわれ警察で対応できないほど増えています。

ポリビア系にコンタクトを取ろうと試みましたが、彼らはとても閉鎖的でわれわれブラジル人と交流したり一緒にしようとしたりしないのです。ポリビア系がわれわれ警察を呼ぶのは自身が盗難に遭った時だけで、警察の支援や協力を得ることに問題を抱えています。彼らはわれわれ警察とコンタクトがなく、ブラジル人との相互交流を受け入れません。われわれ警察とコンタクトのある唯一の外国人はレバノン系です。彼らは CONSEG に参加はしないけど、警察に協力的で、警官と会話したり問題を教えたりしてくれます。あとわれわれは、少人数だけれど韓国系のグループともコンタクトを持ち始めています。小さいけれど始めていることがあります。われわれは（外国人への）接近を試みているのです。

警察官 A 氏は外国人をめぐる問題として言語、および、異国の法律を理解することの難しさを挙げている。また、ポリビア系の閉鎖性を指摘しながらも、外国人を含めた地域コミュニティを重視する警察の新たな試みに言及している。

② パリ 警察官 B 氏（40 代、男性、BCS 勤務）<sup>11</sup>

われわれが行う地域活動に、若干の外国人は参加しますが多くはありません。近隣連帯プログラムに参加する外国人もいます。ですが、ブラジル人ほど活発ではありません。なぜかわかりませんが、ブラジルの方がより意欲があり活発なのです。ポリビア系やパラグアイ系など近隣の外国人はあまり意欲がなく活発ではないです。ここから 200 メートルくらい先に住民の約 90% がポリビア系という一角があります。われわれはそこに近隣連帯プログラムを導入しようとして説明に行きました。ほとんどがポリビア系でパラグアイ系もいました。彼らと色々話し合いました。何人かはプログラムに参加していますが、彼らは参加をためらいがちです。

<sup>10</sup> 2018 年 8 月 27 日、ブラスの BCS にて行った筆者（近田）による警察官へのインタビュー。

<sup>11</sup> 2019 年 9 月 6 日、パリの BCS にて行った筆者による警察官へのインタビュー。

問題は外国人自身による自己防衛にあります。外国人はここに住んで、お金を家に保管する傾向にあります。近所の誰かがそのことを知り、他の人にそれを教える。そして、お金を盗みにくる人が現れる。外国人がおびき寄せてしまっているのです。家に大金があるから「盗んで」と言っているようなものです。ブラスでは家の金庫に100万リアルも保管していた中国系がいました。彼はそれを盗んでくれとお願いしているのです。犯罪を誘発するような人たちをわれわれが守るのは非常に難しいです。われわれは防犯に努めていますが、外国人は犯罪を起きやすくしてしまっています。彼らは銀行に税金を払ったり財産を申告したりしませんが、それは彼らが犯しているリスクです。間違いは警察にあるのではなく、財産を隠そうとする外国人にあるのです。

警察官 B 氏のインタビューから、地域住民を対象とした BCS のコミュニティ活動に外国人はほとんど参加しないこと、ポルトガル語とスペイン語は類似点が多いがスペイン語圏の人でさえ近隣連帯プログラムへの参加を躊躇することがわかる。また、外国人は財産を自宅に保管するため犯罪の標的になりやすいと述べている。

③ ベレン 警察官 C 氏 (50 代、男性、BCS 勤務)<sup>12</sup>

民族の多様性は問題ではありません。・・・私の理解では、新しいものはすべて複雑です。適応しなければなりません。恐らく外国人にとって自国よりもブラジルのリズムに合わせるのは難しいでしょう。われわれは、ボリビア系、ナイジェリア系だけを対象としたイベントは行いません、無理です。外国人はここで働くわれわれに自らを紹介したり、自身の仕事や学校へ行ったり、時間とともにブラジル人化していくのです。そして、われわれが行うイベントに参加するようになります。特定の民族やグループではなく、すべての人を対象としたイベントに。・・・はじめは少し複雑でしょう。でも、一度イベントに参加すれば、そのあと継続して参加するようになります。クリスマスをはじめわれわれは色々なイベントを開催しています。

警察官 C 氏は A 氏と B 氏と異なり、民族の多様性は問題ではないと述べている。警察官 C 氏は長年ベレンの BCS で地域のコミュニティ活動に従事し、JICA の交番に関する研修で日本を訪問した経験を持つ。ベレンの BCS は勤務警察官の数も多く活動が活発だったが、C 氏が定年退職した 2018 年 9 月以降はクリスマスなどの活動を行わなくなった。

④ ブラス・パリ CONSEG 副会長 D 氏 (70 代、女性、年金生活者・社会運動活動家)<sup>13</sup>

恐らく情報や通知の不足から外国人は参加しないのでしょうか。他にも言葉の問題があ

<sup>12</sup> 2018 年 8 月 24 日、ベレンの BCS にて行った筆者による警察官へのインタビュー。

<sup>13</sup> ひとつの CONSEG がブラスとパリ地区を管轄している。2018 年 9 月 17 日、パリにある CONSEG 副会長自宅にて行った筆者による同氏へのインタビュー。

ります。CONSEG で話されていることを外国人は理解できないでしょう。もし中国語を話す人なら（ポルトガル語で）自分の言いたいことは言えないし、中国語で話されても参加者の誰ひとりとして理解できません。少しでもポルトガル語ができれば違いますが。住んでいる地区に治安のことや生活の問題に対処する CONSEG という審議会が存在することを、外国人が知り参加するためには通知が不足しています。

D 氏は地域の治安に関する情報が外国人に伝わっていない現状、および、その原因が言語にある点を指摘している。

⑤ ベレン CONSEG 会長 E 氏（60 代、男性、会社経営者）<sup>14</sup>

インフォーマルな情報が公的な情報より重要です。なぜなら多くの場合、インフォーマルな情報は災難を回避してくれるからです。隣人は近所で起きることを見ていて、何が良いのか悪いのかを知っています。もしこの情報が早く警察に届けば、警察は犯罪を抑え込むよう対処できます。この方が警察にとってすでに進行してしまったことと闘うよりずっと効果的です。

近隣連帯プログラムやコミュニティ警備にとってより良いことは情報です。ただ、その情報は外国人には機能しない、多分まだ。将来的にはわからないが。われわれは多くの外国人がここへやって来ているのを知っている。彼らは（合法的に滞在できるよう）ブラジル生まれの子供が欲しいのです。ベレンの役所はポリビア系でいっぱいです。毎日 5 人、6 人と子供を登録しています。

外国人は不法な滞在であり違法な商売を行っているため、泥棒の標的となるのです。・・・治安の効果にとって、ポリビア系、中国系、ペルー系、アラブ系は、放っておくと虫やゴキブリが寄ってくる飴玉のようなものです。ここへやって来る外国人は他の所から強盗を引き寄せます。副次的に外国人だけでなく、ここの住民も強盗に狙われることとなります。・・・外国人は自らを守ろうとしないし、CONSEG は誰にでもオープンなのに参加しないし、われわれが招待しても近寄ってこないのです。

私の印象では、外国人の集住地では毎日ひとり犠牲者が出ています。ですが、そのうちの 2 か 3 % くらいしか警察へ届け出をしません。97% くらいは何も言わないのです。なぜなら、彼らは恐れているのです。不法な状態にある移民、居住形態、労働を警察に見られることを。（警察にわかれば）問題となるので、外国人たちは警察に接触したがないのです。

E 氏は防犯における情報、とくに地域住民によるインフォーマルな情報の重要性を強調する。一方、地域コミュニティ重視の新たな治安対策が依拠する情報は、外国人に共有されていない現状を指摘している。また、外国人が犯罪の標的になりやすい点、このことが地域の治安悪化につ

<sup>14</sup> 2019 年 4 月 30 日、ベレンにある CONSEG 会長が経営する会社にて行った筆者による同会長へのインタビュー。

ながる点、それにも関わらず外国人の治安問題への関心が低い点、そして、外国人の違法性が治安改善を困難にしている点などを述べている。

(3) 移民当事者へのインタビュー調査

① ボリビア系 1 世 F 氏 (70 歳前後、男性)<sup>15</sup>

F 氏はブラジルに 35 年居住するボリビア人で、サンパウロ市内にある複数のボリビア系団体の理事長などを歴任したボリビア系コミュニティのリーダーである。ブラスとベレンのほぼ中間にコインブラ通りという狭い道があり、そこでは毎週末ボリビア系の青空市場が開催されている(写真 4)。F 氏はコインブラ通りにボリビア料理店を所有し、家族で経営している。

(BCS について) われわれは知っています。私がブラジルの警察当局に反対な訳ではありませんが、時として差別がすごく深刻なのです。われわれボリビア系だけではなく、ナイジェリア系、日系、韓国系など、最近では自国の問題との関連でとくにベネズエラ人にも。確かに警察はここで働いてくれますが、ある種の差別があるのです。コミュニティ警察に電話して「どこですか?」と聞かれ、「コインブラ通りです」と告げると「ああ、コインブラ通りね」と言われます。警察は面倒がって来るのがすごく遅いか、時には来ないこともあります。でも、「ブラジル人です」と言ってコインブラ通り以外の所から電話すると、警察は 2 分で来てくれます。われわれ外国人は警察に感謝していますが、差別を減らしてほしいです。

そのこと(近隣連帯プログラム)は知りません。・・・私は警察の電話番号は持っていませんが、近所の人たちの電話番号を持っています。近所の人たちはボリビア人ではなくブラジル人です。何か起きたら WhatsApp で「裏庭近くを通っている奴を知ってるかい?」などと連絡を取り合っています。

外国人は母国へ帰るつもりで異国へやって来ます。「私は外国で働いて国へ帰る」と言います。(滞在する国の)政治や治安、何もかもに関心がありません。外国人はただ働いてお金を稼いで帰国したいのです。これがボリビア人の考え方です。だから(ブラジルの)治安のことにほとんど関心を持ちません。

われわれはより脆弱な存在となっています。なぜなら、泥棒が外国人かブラジル人のどちらから盗むかという、いつも外国人からだからです。われわれは標的なのです。・・・われわれは時として身分証明書を持っていません。すべての外国人は異国に着いた時には身分証明書がありません。働いてお金を稼いでも、銀行に預けるには身分証明書が必要です。でもそれが無いのです。身分証明書を作るのはとても大変です。なので結局、お金を持っている不法滞在者になってしまうのです。では、お金をどこにしまいますか? ベッドの下とか。政府が何かしら対策を取ってくれば、われわれはこんなにも泥棒の標的にはなっていないでしょう。

<sup>15</sup> 2019 年 7 月 20 日、コインブラ通りにあるボリビア系 1 世が経営するレストランにて行った筆者による同氏へのインタビュー。

F氏は、警察との関係において外国人が差別を受けていると主張する。近隣連帯プログラムのことは知らないが、長年ブラジルに居住していることもありブラジル人の隣人と治安に関する情報を共有している。また、出稼ぎ目的の外国人はブラジルの治安に関心が希薄な点や、身分証明書がなく不法滞在になる傾向にあるため犯罪の標的になる可能性が高い点など、自身の経験をもとにした外国移民の脆弱性を指摘する。さらに、ポリビア系の人々がコインブラ通りなど特定の地域で集住・労働している状況を理解できる。



写真4 ポリビア系が週末に青空市場を開くコインブラ通り（2019年7月 筆者撮影）

② 台湾系2世 G氏（40代、女性）<sup>16</sup>

G氏はブラジル生まれの台湾系2世で、ポルトガル語が得意ではない1世の母親や兄妹とベレンのBCS近くに40年以上居住している。本人は台湾に3年間留学した経験があり、現在は中国系の会社に勤務している。

唯一（BCSを）必要としたのは、家の近くで夜遅く2時頃に電線をいじっている人を私の妹が見かけ、怪しいと思い（BCSに）電話した時でした。そうしたら警官は「ああ今は無理です。仕事です。」と言って、何が起きているのか見に来てくれませんでした。それが最初で最後です。なぜなら、私たちはBCSに電話しても何もしてくれないという話を以前に聞いていたので・・・私は（BCS警官による）自宅訪問を一度も受けたことがありません。BCSのコミュニティ活動も一度も見たことがありません・・・時にBCSのすぐ近くで何かしら事件が起きますが、警官は何もしてくれません。以前、ベレンのBCSのすぐ近くの銀行でお金を下ろした人が強盗に襲われ殺されました。私を含め

<sup>16</sup> 2019年9月28日、コインブラ通りにある台湾系2世の友人宅にて行った筆者による同氏へのインタビュー。

BCS 付近の住民は安全だと感じていません。

(近隣連帯プログラムを) 聞いたことはあります。でも、携帯のアプリを使うことは知りませんでした。

実際のところポリビア系は犠牲者です。なぜなら、泥棒は彼らがお金を家で保管しているのを知っているからです。中国系も同じく標的です。不法滞在者が多いので銀行に口座を持たず、家にお金をしまうのです。・・・私の近所のポリビア系の2人は自宅で強盗に遭いました。強盗はポリビア系の家に侵入し、彼らを人質にして、縫製の機械や全部盗んでいきました。

私はポリビア系とはほとんど交流がありません。なぜなら、彼らは一日に12時間以上も作業場のなかで働いているからです。私が住んでいる一角に知る限りでポリビア系の家が6軒あります。家族や子供の両親以外の大人も一緒に雑居で、家の奥で働きながら、全部で何人が一緒に住んでいるかは知りません。私の隣人がポリビア系に家を貸したのですが、彼らは夜遅くまで壁越しに縫製の機械を使って働くので、その音がうるさくて問題になったと言っていました。夜中までその音で眠れなかった妹が外を見ると、ものすごく多くのポリビア系が商品を持って往来していたそうです。

私たち家族は有料の夜の警備員を利用しています。多分もう15年くらいになります。支払いは毎月で直接警備員に渡します。警備員は夜10時からオートバイで地域を見回ります。彼は民間人ですが何かしらの警察当局と関係しています。私たちは夜出かけなければならぬ時や不審者を見た時など、何度もその警備員を呼びました。警察より良いです。なぜなら、警察を呼ぶと身分証明などの書類を見せたり、両親の名前を言ったり、何が起きてるのか説明したりしなければならず、警備員の方が早いし問題を解決してくれます。近所のポリビア系の人も警備員を利用しているのを見たことがあります。

G氏は長年ベレンのBCS近くに居住している経験をふまえ、警察官B氏と異なり同BCSの活動は活発ではないとの印象を持ち、近隣連帯プログラムは知っているが詳細についての面識はないと述べている。また、近隣にポリビア系の人が多くいるが交流はなく、就労形態の違いなどから地域で問題が発生している現状を指摘している。さらに、地域の治安に関して公的な治安当局の警察よりも、不法移民の場合は問題となる身分証明書の提示などを求めない民間の警備員を頼りにしている様子を語っている。

### ③ 日系1世 H氏 (70代、男性)<sup>17</sup>

H氏は筆者の調査対象地域から少し離れた地域に居住しているが、1980年から調査時もブラスで衣料関連の事業を家族で営んでいる。戦後移民で日系1世のH氏は複数の日系団体の要職経験者である。

治安はですね、ブラスは悪いですよ。この店とは別のところで卸しをやっていたけど、

<sup>17</sup> 2019年8月26日、ブラスにある日系1世が経営する衣料小売店にて行った筆者による同氏へのインタビュー。

そこが泥棒に入られた。壁破ってね、金庫開けられて、金から小切手からみんな取られたんですよ。家にも3回も泥棒が入って。強盗が拳銃持ってきて「ドル出さない、出さなかったら」と脅すんですよ。もう日本に帰ろうと、なんていうかもう怖くてですね。夜なんか、猫が屋根の上を歩くと「あっ泥棒だ」と、そういったショックを受けてね。

このポスト（BCS）ができてから治安がだいぶ良くなって、取り締まりも良くなってプラスのために良いと思いますよ。・・・泥棒が入ったらすぐあそこ（BCS）に行って解決する。その点は本当に泥棒も少なくなりました。泥棒といってもですね、人の財布を盗むのが専門のスリがいるんですよ。土曜日や年末の3カ月は人がもう3倍4倍も多くなりますね、買い物に来る人がいるので。ここでは警官が目を光らせてくれています。・・・（近隣連帯プログラムを聞いたことは）ないですね、初めて聞きました。

われわれは個人的に見張りを雇っているんですよ。私たちが昼の分も夜の分も払っています。（見張りの人が）何名から雇われているかわれわれはわかりません。多分15件くらい掛け持っているんじゃないですかね、わからんけど。

ボリビア系がたくさんいますけど、よく狙われますよね。そういった（税金を払わないで済む）関係で銀行なんか利用してないんですよ。ほとんどみんな金をドルに換えて家で持ってるんです。それを狙う人がたくさんいますよ。中国系や韓国系なんかもそうなんですよ。

（外国移民同士の相互交流は）ないです。大体そういう風に動いてますね、民族同士の付き合いというか。やっぱりレバノン系はレバノン系、中国系は中国系、韓国系は韓国系、日系は日系とってね。大体このように固まっています。（ブラジルは）移民の国だけど、交わることはありません。難しいですよ、考え方が違うから。

H氏は自身が強盗などに遭った経験をふまえ、劣悪だったブラスの治安がBCSの設置により改善した一方、近隣連帯プログラムについては面識がないと述べている。またG氏と同様、自衛の手段として有料の民間警備員を利用している状況を語っている。さらに、ブラジルには多くの異なる民族がいて犯罪の標的になっている点や、異民族間での相互交流はほとんどない点を指摘している。

## おわりに

前項のインタビュー調査から、本稿で取り上げた外国移民という要素に関わらず、地域の治安に関する情報の共有が犯罪の防止にとって重要である点を理解することができる。そして、サンパウロ州警察が近年実施している地域コミュニティ重視の新しい治安対策は、警察官が住民にとってより近い存在になることや、住民同士が携帯のアプリなどを通してつながり合うことにより相互の関係性を深め、治安に関する情報を共有するネットワークを構築しようとするものだと

いえよう。

ただし、BCSの警察官とCONSEGの要職者という地域の治安関係者の言説は、防犯にとって重要である情報を外国人と共有することが困難な状況を物語っている。財産を自宅などに保管する傾向のある外国人は犯罪の標的になる可能性が高いが、言語の問題もあり、治安に関する情報を共有する場にほとんど参加しない。このような現状は、外国人が多く居住や労働する地域の住民にとって、自身も犯罪に巻き込まれ得る懸念や可能性につながっている。またインタビューでも言及されたBCSの活動に関して、BCS勤務の警察官の人員が削減傾向にあり、パリとベレンのBCSでは警察官による地域住民の自宅訪問を含め地域コミュニティにアクセスする活動が以前のように行われていないことが、筆者のフィールド調査から判明している。

外国移民当事者の言説は、外国人が財産を銀行に預けなかったり不法滞在だったりするため、犯罪の標的になりやすいことを外国人や移民自身も理解していると述べる。それにも関わらず、外国人は出稼ぎ移民である場合が多く一時的にしか滞在しない場所の治安への関心が低いため、情報を共有する場に参加しない状況を示している。また外国移民は、治安をはじめ境遇が類似していると考えられるが、異なる民族とは交流をほとんど行っていない。BCSについては肯定的な評価もあるが、外国人への警察の差別的な対応やブラジルの治安問題の深刻さもあり、外国人もブラジル人と同様に日常的な自衛手段として民間警備員を利用している様子がわかる。また、筆者が行った他の関係者へのインタビューも合わせ、近隣連帯プログラムの認知度は低いといえる。

本稿では、グローバル化が進む世界でより注目されるようになった外国移民について、ブラジルで深刻な問題である治安との関連から取り上げた。具体的には、移民を多く受け入れ現在も多くの外国人が居住・往来するグローバル・シティであるサンパウロにおいて、警察が地域コミュニティ重視の新たな治安対策を実施するなか、犯罪の標的となりやすい外国人がどのような状況にあるのかを究明した。インタビューをはじめとするフィールド調査から、犯罪の予防には地域コミュニティに関する情報の共有が重要であり、サンパウロでは警察の新たな治安対策により情報共有のネットワークの構築が試みられていることがわかった。ただし外国人は、不法滞在や違法就労な場合もある出稼ぎ移民の特性から脆弱性が高く、言語の問題も抱えている。また、生活の安全確保をはじめ置かれた境遇に類似性のある他の民族や、ブラジル人とあまり交流せず、特定の地域に集住する傾向にある。そのため、外国人は犯罪の標的になる可能性が高いにもかかわらず、治安に関する情報共有の場との関係性が希薄である現実が明らかになった。本稿のポリビア系1世が指摘する脆弱性は、新型コロナウイルスの感染が拡大した昨今、少なからぬ外国移民の危惧される状況を示唆していよう。

## 参考文献

〈日本語文献〉

伊豫谷登士翁 1993. 『変貌する世界都市—都市と人のグローバリゼーション』有斐閣.

国際協力機構 (JICA) ブラジル事務所 2011. 『ブラジル連邦共和国：交番システムに基づく地域警察活動普及プロジェクト終了時評価調査報告書』JICA.

清水麻友美 2013. 「サンパウロ市のコミュニティ・ポリシング」『ラテンアメリカ・レポート』30 (1): 63-73.

松久玲子 編著 2020. 『国境を越えるラテンアメリカの女性たち—ジェンダーの視点から見た国際労働移動の諸相』晃洋書房.

〈外国語文献〉

Araújo, Temístocles T. F. 2012. “Programa Vizinhança Solidária como ação da prevenção primária e de ferramenta facilitadora da filosofia de Polícia Comunitária.”

([http://www.consegsantoandrecentro.com.br/wa\\_files/Vizinhan\\_C3\\_A7a\\_20Solid\\_C3\\_A1ria\\_20Artigo\\_20Cient\\_C3\\_ADfico\\_20-20Major\\_20PM\\_20Tem\\_C3\\_ADstocles\\_20Te.pdf](http://www.consegsantoandrecentro.com.br/wa_files/Vizinhan_C3_A7a_20Solid_C3_A1ria_20Artigo_20Cient_C3_ADfico_20-20Major_20PM_20Tem_C3_ADstocles_20Te.pdf)), 2020年5月18日アクセス.

——— 2014. “Policimento orientado para o problema: propostas de mecanismos de proteção da população em face da violência urbana.” Tese de Doutorado, Centro de Altos Estudos de Segurança da Polícia Militar do Estado de São Paulo.

Bassanezi, Maria S. C. B., Ana S. V. Scott, Carlos de A. P. Bacellar, e Oswaldo M. S. Truzzi 2008. *Atlas da imigração internacional de São Paulo—1850-1950*. São Paulo: Editora Unesp.

Caldeira, Teresa P. do R. 2000. *Cidade de muros: crime, segregação e cidadania em São Paulo*. São Paulo: Editora 34/Edusp.

Ferragi, Cesar Alves 2011. “O sistema BCS e a institucionalização do policiamento comunitário paulista.” *Revista Brasileira de Segurança Pública*, 5 (8): 60-77.

Freire, Danilo 2018. “Evaluating the Effect of Homicide Prevention Strategies in São Paulo, Brazil: A Synthetic Control Approach.” *Latin American Research Review*, 53 (2): 231-249.

Marques, Eduardo e Horaldo Torres 2000. “São Paulo no contexto do sistema mundial de cidades.” *Novos Estudos*, 56: 139-168.

Muniz, Jaqueline, Haydée Caruso, e Felipe Freitas 2018. Os estudos policiais nas ciências sociais: um balanço sobre a produção brasileira a partir dos anos 2000. *Revista Brasileira de Informação Bibliográfica em Ciências Sociais*, 84:148-187.

Nascimento, Decio E. do. e Marcos A. N. Teixeira 2016. “Segurança pública e desenvolvimento local: experiências do Brasil, Colombia e Japão.” *Revista Brasileira de Planejamento e Desenvolvimento*, 5 (3): 365-385.

Peres, Maria F.T., Diego Vicentin, Marcelo B. Nery, Renato S. de Lima, Edinilsa R. de Souza, Magdalena Cerda, Nancy Cardia, e Sérgio Adorno 2011. “Queda dos homicídios em São Paulo, Brasil: uma análise descritiva.” *Revista Panamericana de Salud Pública*, 29 (1): 17-26.

Sassen, Saskia 2000. *Cities in a World Economy*. 2<sup>nd</sup> ed. Los Angeles : SAGE Publications.

Shimizu, Mayumi 2015. “Ser policial militar: construindo o bem e o mal na atividade diária policial.” Tese de Doutorado, Universidade de São Paulo.

〈ウェブサイト〉

サンパウロ州公安局 (Secretaria da Segurança Pública) (<http://www.ssp.sp.gov.br/>), 2020年6月9日アクセス.

UN, International Migrant Stock 2019 (<https://www.un.org/en/development/desa/population/migration/data/estimates2/estimates19.asp>), 2020年5月18日アクセス.

UNODC, DATAUNODC (<https://dataunodc.un.org/>), 2020年5月18日アクセス.

(こんた・りょうへい／アジア経済研究所)